生物教育学雑誌，3：25-26，1992

丹沢のニホンジカ　歴史と現状

（神奈川県立荏田高校）石　井　　隆

神奈川県の屋根である丹沢山地は，ツキノワグマ，ニホンジカ，ニホンカモシカ，イノシシ，ニホンザル，キツネ，タヌキ，アナグマ，テン，ハクビシン，ムササビ，モモンガ，ノウサギ，イタチなど日本に生息するほとんどの大型，中型哺乳類が生息している．その中で，ニホンジカは比較的姿が見やすく，丹沢のシンボルともいえる動物である．

「丹沢のニホンジカは，何頭位いるのですか？」という質問を，よく聞かれるのだが，この答えは大変難しいと思われる．「あなたの家のゴキブリは，何匹いるかわかりますか？」という質問に答えられる人も多くないのと同じように，動物の数を正確に求めるのは至難の技だ．ましてや，丹沢山地という広い地域のシカの生息数を出すのは大変なことである．

ニホンジカはシカ科の中では中型の種で，中国からベトナムまで分布し，国内では奈良公園で有名であるが，北海道から沖縄のケラマ諸島まで生息している．岩手県の五葉山，栃木県日光，奈良県大台ヶ原などと共に丹沢はニホンジカのフィールドとして有名である．

ニホンジカは１年のうちほとんどは，メスグループを中心とした群れで生活している．集団が大きくなっても，メスが群れを率いるようである．オスは単独で行動することが多いが，秋の繁殖期（９月から11月）になると，ラブコールという物悲しい声を発してハーレムを作る．ハーレムはオスジカ１頭に対してメスジカ数頭のグループを形成する．この交尾期が終ると，メスジカは新しい生命を宿す．そして，冬になりシカにとって厳しい季節をむかえる．冬眠するクマとは異なり，植物の枯れた季節でも餌を求めていく必要がある．冬の主な餌植物はスズタケというササの仲間である．このスズタケは植林地の拡大，テングス病，シカの食圧などと思われる原因で，標高1000m以下のシカの主たる生息地では枯れてしまった．シカは，落葉や樹皮，根などを掘り返してなんとか冬を乗り切っている．また，50cm以上の積雪もシカの行動を制限する．そして，冬の危機を越したメスジカは初夏に子ジカを生む．子ジカはほとんど姿を見ることができないが，親ジカの足跡にからむような小さな足跡，小さなフンが子ジカの存在を知らせてくれる．

さて，丹沢のシカの歴史は，保護政策と食害問題などの間でもてあそばれた現実がある．戦後，進駐軍の狩猟対象になり，多くのシカが機関銃などで殺されたそうである．県の調査で50頭にも減少し絶滅の危険も指摘され，1950年には10年間の禁猟が始まった．その10年間は戦後の拡大造林政策により，新しい植林地が数多く作られた．この植林地は下草を多く含む状態で，シカにとっては格好のエサ場になった．保護政策と良好な生息環境で，シカはどんどん増加した．シカは良好な環境下では，個体数が爆発的に多くなる動物であるので大きな問題が起きた．植林地の食害である．植え付けて数年のスギやヒノキの成長点はシカの頭が届く位置にある．成長点を食べられた木は曲がったりして，経済価値は落ちる．神奈川県では，食害を防ぐため防鹿柵とよばれる，高さ1.8mのフェンスで植林地を覆って食害を防いだ．1960年には，シカ猟の解禁の動きがあったが，丹沢自然保護協会を初めとする保護運動で10年間の禁猟延長が決まった．

しかし，いっこうに止まない食害に対して1966年に有害鳥獣駆除を始め，1971年からはシカ猟が解禁された．神奈川県には５つの猟区があり，12月１日から１月31日まで，土・日曜日を中心にオスジカが撃たれている．メスジカは，有害鳥獣駆除以外では保護獣として守られている．また，猟区以外でも乱場と呼ばれる狩猟が許される地域もある．これらの猟区や乱場は，丹沢大山国定公園や県立公園または，東海自然歩道などの地域と重っている．自然を楽しむ人々にとって，狩猟は安全性と心理的な面で問題があるだろう．狩猟統計によると1988年には，124頭のシカが撃たれている．しかし，狩猟頭数はハンターの自己申告によるので，狩猟頭数はこれを

下回っているはずである．1頭のシカを10人1組のハンターが撃った結果，10人がそれぞれ申告すると1頭のシカが10頭として記録される場合がある．

1984年の大量積雪以降，丹沢のシカを取り巻く状況は，とても厳しい状況にある．

①先に挙げた狩猟の問題として，猟区は個体数を管理して行うのでなく，毎年の狩猟頭数からの推定で狩猟の継続が行われている．ハンターは狩猟税を払っているのでシカの個体数が減少しても，なんとか撃とうとするはずである．狩猟頭数が，そのままシカ個体数の推移にはならないと思われる．

②有害鳥獣駆除も問題で，毎年同じ地域で同じ理由で，申請が出される．被害実態が客観的に証明されないで，有害という名目でシカを初め多くの動物が殺されている．

③シカとの共存から作られた防鹿柵も現在では延長120㎞にもなり，神奈川県の海岸線と同じ程度の距離になっている．かなり古い柵は壊れてきているが，15m程に成長した木(食害の心配はほとんど無い)の柵もシカを拒んでいる．物理的にシカが通行できない地域が増えてきている．

④林道の建設が進み，シカ道を分断したり，野犬に追われて法面(のりめん)(道路の断面)から落下したりするシカが出てきている．さらに，県道秦野津久井線では石積みの法面(のりめん)を作り，落石防止ネットを張り巡らせて，国定公園内の道路としては，動物にやさしくない道路作りが進んでいる．さらに，宮ヶ瀬ダム完成に向けて道路の拡幅が続けられるようである．

⑤1984年に多くの積雪があり，大量のシカが死んだ．自然現象だからしかたがないと言う人もいるが，そうであろうか？．シカがある程度の人為的環境の中で生活している状況では，大量積雪は脅威である．子を身ごもったメスジカや当年子のシカがいなくなれば，次世代にも影響がでるのは必至である．

⑥様々な形での密猟問題がある．シカ肉は1kgあたり数千円で取引されているそうである．これを目当てに，ククリワナと呼ばれる針金製のワナが仕掛けられている．このワナは，ケモノ道にシカの首の高さにハリガネを丸めて，シカが通ると首を締めて殺すワナである．10年以上古いワナでも，依然としてシカを殺し続けている．西丹沢の特別鳥獣保護区では，600個以上もククリワナをはずしている．また，狩猟期間中では保護されているメスジカを殺したり，保護区の中でシカ猟をしたりする密猟もある．このような密猟には，学生や自然保護グループによる防止活動が行われている．

⑦密猟とも関係があるが，狩猟に利用した犬が放置され野犬化する事で問題が広がっている．12月から6月頃まで，保護区内のシカが野犬に追いかけまわされて，死ぬ事件が近年頻発している．野犬対策はかなり難しく，法律上の盲点でもある．

この様な厳しい状況の中に，現在様々な調査が進行中である．シカに電波発信機を装着し，1年を通じて行動圏を調べている．丹沢は，沢や小尾根が入り組んでいるので電波を捕らえるのは大変な仕事である．また，冬期には餓死個体がでないように「給餌」を行っている．これは「餌づけ」とは異なり，危機的なシカの保護のために行われるものである．給餌植物はシカの生息していない南足柄市より運んできている．さらに，給餌がシカにどのような影響を与えるかを調べるために，シカの体重を計測する作業も行っている．冬期の給餌により，植林木の被害を防げるかどうかの実験も行い，丹沢のシカの生息環境を考える重要な資料作りもしている．また，残念ながら死体として回収したシカは，獣医の手で解剖され，栄養状態や年齢を推定し，生理的な面での調査も進行中である．

様々な問題を解決するのは大変な事であるが，丹沢のシカを神奈川県の自然のシンボルと考えて行動していく必要がある．当然，シカのみではなく様々な動植物の生息環境と人間の共存を理念だけでは終らせないような行動が求められて来ていると思う．